

平成27年5月20日、政策秘書課職員との話です。

昭和55年、予備校生が、両親を金属バットで殴り殺すという「川崎金属バット事件」が起きました。受験戦争やエリート志向が巻き起こした悲劇とされ、当時、話題を呼びました。

時代が変わり、特に東日本大震災以降、価値観が大きく変わったと多くの人を感じています。

例えば、昔は木綿の服は貧乏たらしくて嫌がられていたのに、今は「コットン100%がいい」と、もてはやされています。大企業に就職すれば、一生、安心という時代ではなくなりました。

それなのに、子どもを取り巻く環境、特に「勉強して、良い大学、良い会社へ」という考えだけは変わらないように思います。「川崎金属バット事件」から35年経ったのに、また、今年5月、横浜市で勉強のことを注意された高校生が、母親と祖母を殺してしまう悲しい事件が起きてしまいました。

先日、中日新聞夕刊「紙つぶて」（今年6月末まで毎週火曜日掲載）にコラムを掲載されている静岡大学大学院農学研究科 稲垣栄洋（ひでひろ）教授にお会いすることができました。

稲垣教授に「コラムを読んでいると、教育に通ずるところがある」と感想をお伝えすると、稲垣教授は、「私は自然を見ているだけで教育は専門外ですが、こう思うんです」と次のようにお話ししてくださいました。

生物が生き残って、続いているということは、「生物の生き方は成功している」と言っていると思います。その点で、生物や自然から学ぶことも多いのです。

環境が変われば、どの方法が良いかも変化します。生物は、何が正解か決めることはありません。生物にとって、正解は一通りではないので、多様な子孫を残そうとします。生物がずっと続いている理由は、この「多様性」があるからこそだと思います。

自然界では、区別も優劣もありませんが、常に競争はあります。その競争は、1つの種目だけでなく、たくさんある種目の中で、どこかで勝っているものが生き残っていると言えます。

人間は、モノサシを1つだけにして比べたがりますが、モノサシは、一人ひとりがそれぞれ違うものを持っていて良いはずで、それが多様性です。

それは、「競争しない」ということではありません。人間もどこかで勝負する必要があります。ただ、それは「勉強だけ」である必要はないと思います。

なぜ、私たち大人は、子どもを測るモノサシを勉強というモノサシから変えることができないのでしょうか。

たとえ母親が、勉強というモノサシしか持てないとしても、その他の家族が勉強以外の長所に目を向け、違うモノサシで子どもをほめることはできないのでしょうか。母親と祖母を殺してしまった高校生も、母親と祖母のモノサシが、それぞれ違えば救われたはずです。

家族の中だけで違うモノサシを持つことが難しければ、子どもを地域全体で支えることはできないのでしょうか。それが、地域共生ステーションの役割の一つだと考えています。

2045年には、人工知能が人間の能力を超えと言われています。これから人間は、コンピュータにはない、コミュニケーション力や互いを思いやる心、気遣いといった人間らしいところをもっと、もっと伸ばしていく必要があると思います。

そんな社会を迎える子ども達のために、今から何ができるのか、みんなで考えていきたいのです。



～市長の話を聞いて～

以前、ある講演会で聞いた「多様性こそが、持続性のある方法」というコメントが忘れられません。そして、また今回、稲垣教授も「多様性」の大切さを話してくださいました。

市長は、しばしば「同じものを集めると、絶える」ということをおっしゃいます。私は、いろいろな人が居て良いと頭では分かっているけど、やっぱり自分と同じ考えや価値感（モノサシ）を持つ人と一緒に居る方が楽で、ついつい楽な方を選んでしまいます。つい最近まで、そうすることに何の違和感もありませんでした。もしかすると、私は、「絶える道」へまっしぐらなのかもしれません。

私が子どものとき、近所に、よく注意してくる怖いおばちゃんや、一緒に犬の散歩をさせてくれるおばちゃんなどが居ました。今、思えば、多くの近所の方に見守られていたんだなあと感じます。今、大人になった自分が、子ども達に同じように接することが、ご近所の方々への恩返しだと思うので、まずは「おはよう」のあいさつから一歩ずつでも始めていきたいと思っています。